心をみつめる

第その三十一

北九州市内・近郊の寺院の僧侶にお言葉をいただくコーナーです。
老後を心豊かに生きるためのヒントとなりますように・・・。

不請の友

経典に「不請（ふしょう）の友」という言葉があります。不請とは、「請い望まれなくても、救いの手を差し伸べる」という意味で、仏や菩薩が、私たちのために慈悲心をもって一方的に働きつづけることを言います。つまり、わたくしたちから請い求めることもないのに、仏・菩薩は、私の心の中を察して、仏や菩薩の方から寄り添い続ける、それが真の友である、というのです。

経典には「捨身飼虎（菩薩が身を捨てて、飢えた虎を飼う）」という話しが説かれています。この話は、シルクロードの仏教遺跡に壁画として描かれたり、法隆寺の国宝「玉虫厨子」の側面にも描かれています。

薩埵という名の菩薩が森を歩いていると、まさに餓死しそうな虎を発見しました。よく見るとそれは母親の虎であり、乳のあたりには六匹の赤子の虎が生きています。このままでは、赤子の虎も含めて七匹の虎が死んでしまうことを心配した薩埵菩薩は、捨身の行（自分の命を与える菩薩行）を決意します。服を脱ぎ母虎の前に立ち、「さあ虎よ、我が身を食べよ」と言いますが、衰弱激しく、母虎は食べることもできません。そこで薩埵菩薩は、倒れていた虎の背後にある崖によじ登り、さらにそこに生えていた竹を一本折って自らの首に刺し、血がほとばしり散る中、虎のもとへ頭から墜ちていったのです。その血の臭いで、虎は野生の本能を取り戻し、菩薩の身を喰らい、小虎も含めて七匹の虎がいのち救われた、というのです。虎は菩薩に助けを請うたわけでもなく、菩薩が一方的行った捨身の行でした。「不請の友」とはこのような菩薩の一方的な救済活動を言うのです。

菩薩は身を虎に与え、虎は菩薩を食し、命を救われました。しかし、虎は、菩薩を食べるぐらいですから、この虎が人食い虎であることはまちがいありません。菩薩が虎を助けたことは、将来、小虎も含めて七匹の人食い虎が、村々に出現し襲い、村人達を恐怖におとしめることになるかもしれません。人々は虎への激しい非難と憎しみをもつことになるかもしれません。菩薩は、そのよう事態を起こしかねない虎を、助ける意味があったのでしょうか。

この話は、菩薩の究極の慈悲行が強調され、私たちの生活の中では、夢物語のように感じられます。しかし、経典の意図をあらためていただくと、わたしたちは菩薩の側に立つのではなく、あくまでも虎、つまり人食い虎の立場たねばならないということがいただけます。

わたしたちは虎のように人を喰らうことはありませんが、言葉で人を刺し、傷付けることは日常茶飯事です。あるいは自分の立場を守るために他人を踏み台にすることもあり得ます。生きるということは、虎が人を食べねば生きていかねばならぬように、多くの人を傷付けながら生きてゆかなければならず、同時に私たち自身も、他人からの非難、悪口なども受けながら生きてゆかねばなりません。わたしたちの日常生活は心清らかに平安に生きるどころか、日常の中で、憎しみ、不平不満、悲しみになどを抱え、苦悩の闇の中で手探りをしながら生きているようなものです。

菩薩は、そのような悲しい人間の性を察し、人から何と非難されようとも、どのような罪を抱えようとも、「汝のために命を捧げる」と一方的に働くのです。

経典に説かれる菩薩の慈悲は、人間の定めた常識や善悪にとらわれることなく、いのちを生きているその事実に、働くと言われています。

自分が様々な出来事を抱えて生きているとしても、究極の慈悲を与える菩薩の働きが、ここにある。そのことを忘れるな、とこの経典の物語は私に語っているように思います。

西宗寺 住職
毛利 俊英 さん

浄土真宗本願寺派 西宗寺
北九州市小倉北区香春口
2丁目4－23
093-921-7348